

死刑囚の改心

美和勇夫

「わが思い、小鳥の心
あい通い、今ある命ひと
りいとしむ」(ある死刑
囚辞世の句)

数々の悪質極まる殺人
事件を重ね、最高裁で最
終の死刑判決を受けた男
が例えば冒頭のような歌
を詠んだとする。

★ ★ ★ ★ ★

この死刑囚には誰も身
寄りはない。あけてもく
れても独居房からは格子
窓を通して四角い空が見
えるだけである。

彼は毎朝、格子窓の外
にさえずる雀の声を聞き

雀を掌にのせ、その命の
あたたかさに感動し生き
ている自分の命に、限り
なきいとおしさを感した
のである。

「何とかして、俺も生
きたい。限りある命を生
きたい」

死刑囚は心の底から泣
きさけんだのである。

★ ★ ★ ★ ★

識者(死刑廃止論者)
は言う。

かくの如き、清らかな
心にたちいたった彼を、
なぜ、法は、それでも殺
せと命ずるのか。

殺したからといって一
体何になるのか。

その意味においてこの
批判は正しい。

しかし、なぜこの男が
かくまで澄んだ心の持主
になったのかを考えてみ

る必要もある。

それは、いつの日か近
い将来必ず己れが死刑を
執行されるといふタイム
リミットの絶望と、他に

ほとんど何もすることが
ないというおそろしいま
での制約が大前提である
ということである。

★ ★ ★ ★ ★

サマセット・モームが
言うように、大方の人間
は(牧師でさえも)、時
の流れにまかせて怠惰な
一生を終える。

それは、だれも自然死
が確実におとずれること
を知りつつも、その時期
をまだまだ先だと思ふか
らである。(死への恐れ
がないからである)

五〇歳になればまだ二
〇年は大丈夫だろうと思
い、七〇歳になればまだ

一〇年は、と思ひ八〇歳
になればまだ五年はと思
つて、かくして己れが少
しずつでもなんとか生き
ながらえることが出来る
という勝手な樂觀をもつ
ているからである。

黒澤明と名作「生きる」
を例に出すまでもなく、
「お前の命はあと一年だ」
と宣告されれば、人はそ
れなりに覚悟を決めて、
もつと真剣に人生を生き
るであらう。

★ ★ ★ ★ ★

大石内蔵助がああの時、
切腹を申し渡されずに生
きながらえたとしたら、
その後いかなるまっとう
な人生を送ったか。死ね
るまで浅野に忠節であつ
たろうか。

東条英樹が断頭台に消
えず、今も生きていたと
したらいかなる昭和の大
物とあいなつたか。

曾根崎心中はそこで燃
えつきたからこそ華とな
つたのである。

くだんの死刑囚が、も
し釈放されたらどのよう
に人生を生きてるのであ
うか。

(筆者は、多治見市上
野町在住)